

## ウェラーズヒル小学校における日本語バイリンガルプログラム実施とその成果について (The Wellers Hill State School Japanese Bilingual Program: implementation and results)

橋本琢 ジョン・ウェブスター (Taku Hashimoto and John Webster)

### はじめに

ブリスベン市内から車で7分ほど離れたところにバイリンガル教育を行っているウェラーズヒル小学校があります。この小学校で2014年から始まった日本語バイリンガルプログラムは、現在380名の生徒を有し、生徒数は年々増加の一途を辿っています。プログラムに参加する子ども達のほとんどが英語を話す家庭の子どもであり、残りの1割は片親が日本人で、両親とも日本人という家庭は2組しかありません。本稿では、このバイリンガルプログラムの概要と成果を述べ、今後の課題に言及したいと思います。

### バイリンガルプログラムの概要

このバイリンガルプログラムは、幼児期における言語習得は、脳細胞の活性化、脳神経回路再形成 (Neuroplasticity) (Bialystok, Craik & Luk, 2012; Carlson & Meltzoff, 2008; Miyake, 2000; Rodriguez-Fornells et al., 2002)、認知症の防止 (Bialystok et al., 2004)、そして母語である英語力向上が期待できるということから始まりました。プログラムは、CLIL(Content and Language Integrated Learning)の手法を使い(Coyle, Hood & Marsh, 2010)、一日の授業の半分ずつを日本語と英語それぞれで勉強し、「日本語(国語)」以外の科目はすべてオーストラリアで定められたカリキュラムに則って作成されています。

算数、理科、HASS(Humanities and Social Science)<sup>注1</sup>の単元はすべて日本語と英語で分け合い、子ども達は同じ内容を双方の言語で同時に勉強することはありません。次の年には前年勉強した単元を交差し、子ども達は前年日本語で勉強した単元を今度は英語で復習するという方式でカリキュラムがデザインされています。

当初、母語の英語もままならない子ども達が第二言語を習得するプログラムへの入学に抵抗を示す保護者もいましたが、プログラム開始半年前から保護者に定期的な説明会を開催し、バイリンガル教育のメリット、そして本校の指針を説明し徐々に保護者達からの理解や指示を得ることになりました。

2014年、バイリンガルプログラムの初日には盛大にパレードを開催し、校長からの説明を受けた後、子ども達は英語と日本語の先生達から教室内のルール、授業中のルール、教師達に対してのルール、学校のルールの説明を受けました。授業が始まり、各々教室に戻ると

---

<sup>注1</sup> 日本の社会科にあたる

日本語の先生達は通常の会話スピードで授業を進めました。1、2週間もすると、子ども達の耳も慣れ、先生達の指示も一つずつ段々と理解していきました。

本校では、子ども達はただ単に日本語を第二言語として勉強しているだけではありません。日本の伝統文化にも触れる機会がふんだんにあります。例えば、節分の時は鬼が教室に来て豆まきをしたり、皆で恵方巻を作って食べたり、雛祭りの時は七段飾りのお雛様を見学し、子どもの日には兜を飾り、七夕の際は短冊に日本語で願い事を書いて、笹の葉に吊るします。

日本文化の価値観を学ぶことも大切にしています。特に長幼の序を大切にする意味から、目上の人に敬意を示すため、校長先生、教頭先生、学校訪問者が教室に訪れた際には必ず起立し、号令をかけ着席します。また、他の教室に出入りする際は「失礼します」と言い、フルーツを食べるおやつの中には必ず皆一斉に「いただきます」と言います。このように、日本文化を通じた国際理解教育にも力を注いでいます。

なお、本校においては保護者の為に無料の日本語授業を行っていて、子ども達だけではなく学校の地域、コミュニティに対しても日本語の普及に力を注いでいます。そして2学期に一度の授業参観日には、保護者が授業を見学する機会を設けています。保護者は、自分の子どもが日本語の授業についていっているのか、また、子どもの伸長度はどうか、という不安を授業を実際に見てみることで、取り除くことができます。

## 成果と展望

当学校には Ricoh のインタラクティブホワイトボードが常設され、Wifi 環境も完備し、テクノロジーやコンピュータが自由に使える学習環境が整っています。これにより4年生からは iPad を駆使して、数々の日本語のアプリを使い、日本語のタイピングを練習する時間を設け、ゆくゆくはプログラミングやコーディングの授業を行い、バイリンガル教育と STEM 教育の融合を図ろうと考えています。また Ricoh との提携により、テレカンファレンス用機器の Unified Communication System を譲り受け、東京都中野区立緑野小学校との間で国際交流授業も行っています。

緑野小学校の他にも現在定期的に山梨県南アルプス市立白根飯野小学校ともスカイプを通じ国際交流授業を行っています。その模様は同県の地元テレビ局や新聞社からの取材を受け、県内外で話題を呼びました。

また、本校と同様のバイリンガルプログラムを実施している東京都町田市にある私立玉川学園とも 情報交換を目的とした連携をとる姿勢で双方が合意し、今後、本校の子ども達が日本を深く理解し、関わっていけるような国際交流活動をはじめ、交換留学をも視野に入れた関係構築を考えています。

昨年の NHK で本校の取組みが放送された後、東京都、広島市、京都市の教育委員会から視察の申し入れを受けました。視察後、バイリンガルプログラムの子どもの日本語力、英語力、適応力の素晴らしさに驚嘆したという報告を受けました。

2016年には、3年生になった本校バイリンガルプログラム一期生の子ども達が NAPLAN テストを受験し、結果、60%以上の子ども達が上位の成績を残しました。バイリンガルプログラムに参加していない一般プログラムの子ども達の成績と比較をしても、より良い成績を残しました。つまり、100%英語で授業を受けている子ども達より、50%のみ英語で授業を受けている子ども達の方が成績が良かったということです。兼ねてから子ども達の脳細胞の活性化、脳神経回路形成、そして毎日行われる日本語と英語の行き来、つまり、教育のコードスイッチング体験により母語向上の成果が見られ始めたことを示しています。

NAPLAN テストの中で、なかでも著しく一般プログラムの子ども達との大きな差が見られたのが算数のテスト結果です。バイリンガルプログラムでは、2年生の2学期から計算能力向上、数字に対する恐怖症の払拭の為、毎日10分から15分間そろばん授業を取り入れていて、その成果が顕著に NAPLAN のテストに反映されたと思われまます。2年生の終わりまでには4桁までの足し算と2桁までの暗算、3年生は6桁までの足し算と引き算、3桁までの暗算とフラッシュ暗算を取り入れ、4年生の終わりまでには6桁の掛け算と4桁の暗算、2桁のフラッシュ暗算をできるよう目標を掲げています。

来年(2018年)の3月にはバイリンガルプログラムの一期生が日本へ修学旅行に行く予定です。42名の子ども達、25名の保護者、11名の教職員、計78人という大所帯で日本に向かいます。修学旅行中はホームステイの経験も組み込み、子供達が日本での生活を体験し、より深く日本の文化、社会、生活習慣、学校行事等を理解し、日本人との交友関係を築き、更なる言語習得への興味や意気込みを示してくれるように期待しています。

## 今後の課題

この3年間でバイリンガルプログラムの子ども達は順調に日本語を習得し、尚且つ母語の英語の理解力、読解力も当プログラムに参加していない子ども達のそれと比べ、明らかに優位であると感じ取れます。この子供達が6年生を卒業した後、引き続き日本語を学んでいけるような中学高校のバイリンガルプログラムの創設の誘致が今後の課題となります。そして義務教育である10年生を修了した翌年には大学進学への活路を見出すため、バイリンガルプログラム専用の Early Tertiary Course<sup>注2</sup>を本校近辺の大学に創設してもらうよう促しています。その道筋を作り、子ども達が小中高大までの一貫性のあるバイリンガル教育を受けられるようになることで初めて本プログラムが成功したことになるでしょう。

---

注2 早期の大学進級コース

参考文献

- Bialystok, E., Craik, F., Klein, R. & Viswanathan, M. (2004). Bilingualism, aging and cognitive control: evidence from the Simon task. *Psychology and Aging*, 19: 290-303.
- Bialystok, E., Craik, F. & Luk, G. (2012). Bilingualism: consequences for mind and brain. *Trends in Cognitive Sciences*, 16 (4): 240-250.
- Carlson, S. & Meltzoff, A. (2008). Bilingual experience and executive functioning in children. *Developmental Science*, 11 (2): 282-298.
- Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, A. H., Howerter, A., & Wager, T. D. (2000). The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex 'frontal lobe' tasks: a latent variable analysis. *Cognitive Psychology*, 41: 49-100
- Rodriguez-Fornells, A., Rotte, M., Heinze, H. J., Nösselt, T., & Münte, T. F. (2002). Brain Potential and functional MRI evidence for how to handle two languages with one brain. *Nature*, 415:1026-1029.